
NO REGRET

ティア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NO REGRET

【Nコード】

N8686A

【作者名】

ティア

【あらすじ】

時は戦乱の世。自国が滅びた王族の子供たちは、嫌がおうでも、戦いに巻き込まれていく・・・

プロローグ

その少女はまるでボロ布のように転がされていた。後ろ手に縛られた少女は、強い光を放つ目で、この監獄の唯一の出入口、重い鉄の扉を見つめていた。

時はアルド暦1951年。戦乱の世。新しい国が生まれては消え、多くの命が散った年。

決して届かないであろう天窓をちらりと見やる。右手をしつかりと握り締め、ゆつくりとだが着実に扉に進んでいく。

大きな笑い声がして、少女は顔を上げた。美しかったであろう黒髪も、汚らしい床について乱れている。けれどそれを嘆く様子も見せず、入ってきた人物を睨み付けた。

レヴィン。ドルチェ国皇子。またの名を、血の皇子。力をすべてたとみなす彼は、軍部のみならず、国民からも信頼されていた。もちろん、自国の者達だけだが。

「どうだ？はく気になったか」

嘲りの混じった声音に少女は顔を上げた。

彼女は、決して美女というわけではなかった。それなのに、死を覚悟した表情のその壮絶な美しさは、遊び好きのレヴィンさえもを一瞬魅了させた。

少女はゆつくりと立ち上がった。縄は解けていた。右手に握った短剣の切っ先を真つすぐ王子に向け、

「力で私たちを操ろうとしても無駄よ。いつか、後悔するわ。サルディナ王国を滅ぼしたことを。」

体が宙を舞った。我に返った護衛達が皇子を取り囲むようにたち、剣を突きだしたが、死を覚悟した彼女は、唇の端をキュツと上げ、ただ真つすぐ喉元を狙った。

少女の体が数本の剣に貫かれたのと、短剣が皇子の首を僅かに擦ったのは同時だった。

彼女の体は無造作に隅に放り投げられ、静かだった王宮が騒がしくなる。医者を呼ぶ声や遠退いていく足音を、少女は薄めを開けて聞いていたが、やがてその目線を天窓にうつした。最期の光を目に焼き付けるように少女は目を見開き、手を伸ばそうとする。

やがて、彼女の命のもしびは消え去った。けれど暗い独房のなかで、暖かい光が少女の体を照らしていた。

第一章 始まり（前書き）

やたら、名前が一杯出てきて、混乱されるかもしれませんが、さらっと読んでください！^_^

第一章 始まり

薄暗い森のなかを子供たちは必死であるいていた。先頭を確かな足取りで進むのは、サルディナ王国王女、ユリーナ。その後ろを歩くのは、王子ラウル。ユリーナの二つ年上の十九である。二人は、まだ幼い赤ん坊を抱っこしていた。双子の男の子はさっきまで泣き叫んでいたせいか、今は落ち着いて寝息をたてていた。

最後尾をうつむき加減に歩いているのは、メイファ。王族の守護者として王宮に使えているが、まだ十六の少女である。彼女の右手を掴んでいるのは、幼い女の子。おんぶされているのは、もう十歳ぐらいになるであろう男の子だった。

最初に泣き声を上げたのは女の子だった。メイファの手を振り払って、その場にしゃがみこんで、てこでも動こうとしない。皆、足を止めて、怒りを押し隠した表情で女の子、ケティを見つめる。

ケティは、正式にはユリーナやラウル達の妹でなかった。第二夫人の娘なのである。もちろん、だからと言って可愛くないわけではない。けれど、自分達を逃がして、敵国の皇子レヴィンにとらえられた、同じく第二夫人の娘であるブライアのこととも考えると、複雑な気持ちがあることは事実だった。

一緒に暮らしてもいなかった、腹違いの妹。その姉は、自分は私生児だからと命をなげうった。故に、妹を責めることは出来なかったのだ。

ユリーナが立ち止まって、ケティの傍に座り込んだ。妹の柔らかい、第二夫人にそっくりな黒髪を撫でる。

「ケティ、疲れたかもしれないけど、頑張るのよ。」

自分の気持ちを押し殺して微笑みを浮かべる。そして、メイファを見上げた。

「ねえ、そこで寝てる馬鹿の代わりに、ケティをおぶってあげてくれないかしら？」

メイファは頷いて、少年を引き剥がした。

「馬鹿あ。何するんだよ、人が気持ち良く・・・」

さすがの我儘坊っちゃんでも、その場の雰囲気気付いて、口をつぐんだ。ケティがメイファの背中によじ登るのを、ぶすくれた表情で見守っている。

「ルウイ。あなたは、仮にも一国の王子であつたものでしょう！しせ・・・小さいケティでさえも、こんなに歩いていたのに、もっとしゃきつとしなさい！」

目を吊り上げて怒る姉の剣幕におされて、ルウイはうつむいて、謝罪のことを小さく付け足した。

「おねえちゃんが！」

突然ケティが叫び、思わず皆祖国を振り返った。見えるはずもないブライアの姿が心に浮かび、涙がこぼれそうになる。

ユリーナが無理矢理目を背けた。前をみつめ、血を吐くような思いでつぶやく。

「いきましよう。」

メイファが隣まで来ると、ユリーナがささやいた。

「ありがとう。」

「いいえ。」

歩いていくメイファの後ろ姿に、何も声をかけなかった。もう、自分達を守る義務は十分果たしただろうに。メイファの両親もなくなつたと聞いた。まだ若い彼女に、忠誠心など・・・

けれど、もういいのよ、とは言えなかった。戦えるものが必要だった。優しいメイファは、こちらから言わないかぎり、離れようとは思わないだろう。

（ごめんね・・・）

彼らは一歩ずつ歩いていった。確かな足取りで。しかし、確かな未来はなかった。

第二章 ティーリーン

荒い息をたてている皇子を、その少女は無表情で見ていた。

皇子の周りでは、侍女達が、献身的に、額の氷やガーゼを取り替えたりしているが、医者にとって邪魔だということには、気付いていないらしい。

「どうだ？」

扉が開いて、入ってきたのは、天皇ヴィグード。鋭い目付きと、頬の切り傷が印象的な大男だ。

「毒、ですね。」

医者が渋い表情で答えると、ヴィグードは蒼白になった。レヴィンを愛しているといえば嘘になるが、しかし彼は唯一の後継ぎであつた。また、この帝国を率いる手腕も持っていると思込んでいる。

「治せるか？」

「・・・向こう、サルディナ王国では一般的な毒なのかも知れませんが、こちらには、解毒剤は・・・」

「・・・そうか。」

サルディナ王国をほぼ制圧したとはいえ、根強い国民達が各地で反乱を起こしている。解毒剤をとりに行くのは危なかった。

「ところで、ティーリーン。」

低い声音に、先程まで蚊帳の外にいた少女が顔を上げた。

流れるような銀髪によく合う灰色の目に見つめられ、ヴィグードは一瞬ひるんだが、すぐに、詰め寄った。

「なぜ、傍にいなかった？護衛だろう？」

「・・・」

鋭い音が響いた。

力をこめた平手打ちにティーリーンはたたらをふんで、唇を噛んだ。

「申し訳ありません。」

「解毒剤をとってこい。すぐに。」

走っていく少女の後ろ姿を見て、ヴィグードはため息をついた。彼女は、ある日突然、武道大会に参加して、圧倒的な強さで優勝した。その力を見込まれ、レヴィンの護衛士に任命された。

素性も分からない少女を使うのは危険だが、それ以上に他の国に渡したくなかった。彼女の力はそれほどであったのだ。

「あの子、時々消えることがありますね。」

大臣が囁いた。

「男、ですかね。」

「まさか。」

「スパイ、なんてことは・・・？両親も分かりませんし。」

「・・・調べさせるか。」

ヴィグードが呟くと、レヴィンが苦しげなうめき声を上げた。

「耐えるんだ、息子よ。」

手を握り締める。不安な気持ちが胸をよぎって、あわててそれを払い除けた。

ティーリーンは馬に乗って駆けていた。迎う先は、サルディナ王国ではない。まだドルチェ国内の、小さな森だった。舗装された道から獣道にそれて、そこからさらに奥に入っていく。と、視界が突然開けた。

明らかに人為的に作られた小屋に入っていく、簡易なベットの傍に膝をつく。

「母さん・・・私、サルディナ王国に行かなければいけないの。」

眠っている女の手を握り、頭をつける。

「私、絶対復讐するからね。会いたくなくて、避けてたけど、でもいつかはこうなるって分かった。」

女の髪をかきあげ、そっと口付けする。

「会えるかは、分らない。でも・・・」

ふと違和感に気付いて、少女は目を見開いて、固まった。

「か、か、母さん？ねえ、起きて！母さん、ねえ・・・」

もう息はなかった。

「私、母さんを裏切ったあの子を、決して許さないから。」

身を翻す。涙がこぼれないように、義母の教えを最後まで守るために。

小屋から出ると、火を放つ。剣を握り締めた。今度、ここに来るときは、きっとあの子の首を持っているはず。

第三章

国境1（前書き）

短めです。

第三章 国境 1

「まだ？」

ルウイが走ってきて、兄のラウルの手をつかんだ。涙を浮かべた小さな目に飲み込まれそうになって、あわてて、手を振り払う。

「まだだ。」

「だって・・・もう、疲れちゃったよ。その子を降ろして、僕をおんぶしてよ。」

ルウイは甲高い声で叫んで、ラウルの背中の赤ん坊を引きずり降ろそうとした。

「やめろっ、やめろよ。」

普段なら小さな弟に何をされても動じないが、如何にせん、その時は疲れ切っていた。

また、不幸なことに、足場も悪かった。

「うわっ。」

落ちていた枝に足をとられたラウルを、メイファがあわててささえ、赤ん坊はなすすべもなく、崖のしたに落下していった。

「どうしてくれるんだよ！」

泣き声は聞こえない。代わりに、ユリーナが抱いていた赤ん坊が、火のついたように泣きはじめた。

「僕、僕助けに・・・」

「やめろ。」

ラウルが低い声で呟いた。

「もう、助からないわ。あなたまで、死んでしまうかもしれない。」

ルウイは哀しげな目で崖の下をのぞいたが、それが本心からではないことを、メイファは感じ取って、ぞっとした。

ルウイの実の兄弟なのに・・・メイファはその姿に良く知っている人が重なった気がして、目を背けてしまう。

「メイファ、行くわよ。」

「・・・私が助けに行きましようか？」

「いいえ、メイファ。仕方がないわ。私たちは急がなくてはいけ
ないから。」

ユリーナの目が潤んでいるのに気付いて、メイファは黙って歩
きだした。助けたい気持ちは同じなのだ。しかし・・・

「行くぞ。ルウイ、おんぶしてやる。」

「本当？ありがとう！」

屈んでいるラウルと、立ち尽くすユリーナの目が合った。どち
らにも、不安げな色が光っていた。

彼らは、祖国、サルディナ王国から逃げだして、友好国、ロガ
ード共和国に向かおうとしていた。

急がなくてはいけない。サルディナ王国王族一家がすべて滅び
たと知ったら、掌を返して、ドルチェ国につくかもしれない。なかつた。

まあ、その可能性は低いとラウルはよんでいた。ロガード共和
国は、昔は軍国主義だった。敵国のドルチェ国に今更媚をうるよう
なことはしないはずだ。

「国境が見えたわ。」

「ドルチェ国の兵士はいるかい？」

「・・・たぶん、いないはず。迂闊に手を出せないはずよ。」

「向こうに行ったら、もう戻れないんだな。」

ラウルが足を止めた。ごくりと唾を飲み込む。ルウイほどでは
ないにしろ、メイファ以外はみな、箱入り息子、箱入り娘であるこ
とに違いはなかった。

しっかり者のユリーナでさえも、自分の道を自分で選んだこと
などなかった。

けれど今、踏み出さなければいけない。

「いつか、戻ってくるわ。自分の国、にね。」

たった一度だけ、後ろを振り返った。いつも美しかった祖国の
空は、戦争という惨劇のあとで、灰色に濁っていた。

第四章 国境 2

「サルディナ王国へ。」

少女は国境に並ぶ兵士達に固い声で告げた。

「えー、一般人の立ち・・・！」

突き付けられた、天皇直々の命令書に頬を切られそうになって、兵士は思わず仰け反った。

「分かった？」

「わ、分かりました・・・」

「一つ、聞きたい。マヌという毒薬を聞いたことがあるか」

「マヌ・・・？いいえ。」

「ふん。能無しが。」

少女は目を細めて呟くと、馬を駆けさせ、去っていった。

「なんだ、あいつ・・・」

兵士の間にざわめきが走る。

「ああ。思い出した。この前の戦いで、皇子の傍で戦ってた・・・」

「ああ。そういえば。一番数殺したって。」

「おお、恐。関わらないほうがいいぜ。」

兵士達は顔を見せ合って笑った。

マヌ。サルディナ王族だけに代々伝わる秘薬。根は、毒となり、葉は、薬となる。茎には、麻薬効果があり、サルディナ王族が吸うと、気分が良くなるが、他のものが吸うと、一年以内に死ぬという。書かれたメモをもう一度丹念に見返し、少女はそれに火を点けた。じりじりと焼けていく紙を、じっと見つめる。

「・・・」

地面に残った残骸を靴でつぶして、少女は城を見上げた。立派な宮殿だ。豪華、というよりは、繊細で美しい。血気盛んな兵士達も、何か感ずるところがあるのだろうか。装飾品には手がつけられ

ていなかった。けれど、彼女は人工的なものに美しさを感じなかった。金色に光る像も、大きな宝石も、こんなガラクタに魅了される者が理解できない。

城内には、ドルチエ国の兵士がいた。皆、階級は高いほうで、彼女の顔を知っている。

「王族しか入れないような場所はなかったか？」

そう兵士の一人に尋ねると、案外質素な部屋に案内された。否、元は色々置いてあったのかもしれない。全てが持ち去られた後のような雰囲気が漂っていた。

「くそつ。」

あの皇子の命を救いたい訳ではない。ただあの女を殺すには、その敵国にいたほうが便利だと思っただけで、忠誠心すらもない。

だが、任務を遣り遂げられないのは、自尊心を傷つける。

「王族ども・・・持って逃げたか・・・武器にはなるからな・・・

おい、兵士。」

「はい！」

「逃げた、王族の行方は？分かるか？」

兵士は低い声で呟いた。

「ロガード共和国に逃げ込もうとしているようで、森に向かっています。途中までは追跡していたのですが、ロガード共和国には迂闊に手を出せないのです。」

「ふむ。状況は分かった。」

少女は頷くと、手近にあったぼろぼろの布をとって、指を走らせた。

「避難民の格好をしていこう。連れがいると、それらしいが・・・仕方ないな。」

原型を留めている城から一步出ると、そこには戦場の後が広がっていた。反乱を企てる輩がいるのだらう、緊迫した雰囲気が漂っている。

まさか、彼女も本当に避難民の格好で、ロガード共和国の国境

兵士達を騙せるとは思ってもいなかった。大体、国境を渡るという考えは危なすぎる。万一のための防御策というわけだ。逃げ込もうとしている王族達を、どうしても国境につく前に捕まえなければ・

少女は思いっきり鞭をならして、一直線に駆け抜けた。

未熟な子供たちだ。

跡を追うのは容易すぎて、笑いが込み上げてくる。

森の奥に合わない音がして、少女は耳を澄ませた。泣き声……？子供たちの一人が、泣きだしたのだろうか。

少女の怒りの声。女の子の叫ぶ声。聞き取れない呟き。

（おやおや……この人達は、追われているという自覚はないのかしら……）

思わず心の中で呆れて、ティーリーンはそつと馬を下りた。向こうには、あの女もいるはずだ。気付かれるのはまずい。

沈黙と、短い会話の繰り返しの中で、少女は、相手が大体、五人ぐらいだと判断した。無口な少年。偉そうな少女。三分おきに文句をいう男の子と、最初に泣き声をあげた、女の子。そして……あの女。

だから、上から赤ん坊が落ちてきた時は驚いた。咄嗟に、鍛えられた体が動いて手を伸ばしていた。

確かな重さがあるのに、崩れてしまいそうな、なくなってしまういそうな、脆さを感じさせる。目を丸くした赤ん坊を、ただ見つめるしかなかった。

置いていこうか。育てられるはずもないし。

そう考えた少女の心に、記憶がよみがえった。

第五章 復讐 1

記憶の中。

明るい日差しが差し込む森の空き地で、三人は焚き火を囲んでいた。

今日獲ったばかりの獲物の肉を焼きながら、いつも、義母は何かお話をしてくれたものだった。

それは昔話だったり、自分の思い出だったり、時には教訓や、戦いの心構えだった。

「ティーリーン、お前を見つけたときはね。」

珍しく自分の名前が出てきて、少女は不思議そうに顔を上げた。「この国じゃなかった。でも、ちょうどこんな感じの森のなかでねえ。私が狩人として名を馳せていた時で、仕事は次々に舞い込んでくるから本当に忙しかった。」

並べられた肉を手際よく返しながら、遠い目をして女は語った。「その日の依頼は、まあ、ありふれたものだ。狂暴化した狼の退治でね。仕事が終わって降ってきたのがお前だった。」

女はその時のことを思い出したようで、くすりと笑った。

「変な子だったよ。泣きもしないで、目を丸くして。可愛かったね。ただ、不安だった。忙しかったからね。でも・・・天からの贈り物だと思ったよ。」

女に頭を撫でられて、少女は擦ったそうに、しかし嬉しそうに微笑んだ。

「ねえ、義母さん。私は？」

ずっと黙っていた少女が口を開く。

「お前は・・・その話はまた今度だ。」

ティーリーンは腕のなかの赤ん坊をじっと見つめた。義母さんが死んだばかりだ。生まれ変わりだろうか・・・

上から足音がして、少女はあわてて、赤ん坊を地面に置いた。
「ここにいて。」

そう言つと、一気に駆け上がる。状況は分かった。後は攻めるだけだ。

「あの・・・」

震える声で、彼らの前に立つと、膝を付いて手を伸ばす。

「薬を・・・怪我しているんです・・・」

途切れ途切れの声で、絞りだすように。けれどそれは全て演技ではなかった。興奮がかけあがる。狩りの前の野獣が、身を震わせるように。

「あら。」

目が合った少女は、すぐに警戒を解いた。もうすぐ、国境だということもあつて、気がゆるんでいるのだらう。待った甲斐はあった。

金髪の少女は、手を腰の袋にのばす。・・・そこか。

彼女がそれを取りだそうとした。

「危ない！彼女は！」

聞き慣れた鋭い声と耳慣れた、金属の空気をきる音。

飛んできた短剣の軌道をよんで、ティーリーンは飛び上がった。

やはり、気付かれたか。視線の主と目が合う。

「逃げてください。」

彼女が剣を構えるのを横目で確認し、少女はユリーナの袋を奪い取った。

「キヤア！」

袋の中身を確認するが・・・確かに薬草ではあったが、ティーリーンが求めているマヌではなかった。

あわてて目を走らすと、青年の腰にも同じような袋が見えた。

足に力をこめ、高く跳躍。しなやかな体が宙を待った。

「や、やめろ。」

男は叫ぶだけで手応えはない。

怒声。泣き声。袋をつかんだとたん、剣を突き付けられる。

「ティーリーン・・・」

「メイファ。久しぶりだな。」

「どうして・・・」

ティーリーンは肩をすくめて袋の中身を確認した。目的のものだ。

メイファ以外は必死の形相で国境まで逃げていく。だが決して追う気はなかった。

「一つお知らせをね。」

剣を突き付けられているにも関わらず、ティーリーンは悠然とメイファを睨んだ。

「義母さんが死んだわ。」

メイファの剣の先が震えだした。すつと、踏み込み、耳元で囁く。

「あなたの首を捧げるっていうのはどうかしら？」

剣の冷たさを背中に感じて、ティーリーンは笑った。

後ろ手に握った短剣で跳ね返す。

子供の時も、戦いでほとんどティーリーンは負けたことがなかった。その思い上がりで痛い思いもしたが、今はそれさえ克服した。剣と剣のぶつかる金属音。

対峙する相手の感情も、動きも手に取るように感じられる。

一定に打ち続ける心臓の音。汗でまとわり付く髪の毛さえ、邪魔ではない。

一方メイファは知っていた。彼女の強さを一番。

じりじりと後退しながら、国境へと近づく。王族たちと国境兵は、うまく話がまとまったようだった。

背中を向けて、必死で逃げる。逃げ足の速さだけは、ティーリーンに負けたことはなかった。

「逃げるの、メイファ？おい続けるわよ。私はね。」

「ティーリーン。私はあなたに分からせてあげたい。この思いを。」

感情を殺さない生き方を。」

「たった一人の母を裏切った、あなたに何が分かる。優しささえもないあなたに、感情の何が語れるというの？義母さんは、結局はあなたを許していた。でも、私はあなたを許さないから。」

国境の門が閉じた。決して通じ合うことのない、二人の間にそびえ立った巨大な壁のように。

「・・・メイファ。」

怒りも憎しみもこもらない最後の呟きは、風によって届くことはなかった。

第六章 赤ん坊

「レヴィン・・・起きたのか？」

ヴィグードは、寝ずに息子のそばで仕事をしていた。

たいして広くもないのにサルディナ王国を占領したのは、その地に眠る資源や、長い歴史ゆえに尾鰭がついた伝説を打ち壊したかったからだ、間違いだったかもしれない。

中立を保ち平和を尊ぶ彼らを攻めたことに、周りの反応は冷たかった。だが、まあ良い。そのうち忘れられることだ。

「ただ今帰りました。」

気配を感じさせず、いつのまにか立っていた少女に、皇は驚いて目を剥いた。

「いつからそこにいた。」

「つい先ほど。」

少女は袋を取り出して、中からマヌを引き抜いた。葉を無造作に引きちぎって、口に含ます。

「あつ。い、医者は・・・」

「薬草の扱いは分かってます。」

そばにあるコップをとって水を無理矢理飲ませた。そして傷口の包帯をとるとまた葉を押しあてる。

ピクリとレヴィンが動いた。汗が滴ってる。

「大丈夫なのか・・・？」

「毒が出ています。汗を拭き取ってあげてください。」

横たわっている皇子の姿を見て、ティーリーンは殺したらどうなるだろうと思った。世界を手のひらで操ってみるのも面白い。

メイファがロガード共和国に渡った今、手出しを渋っているドルチェ国にいてもたいして意味はない。

「レヴィン！」

皇の声で、少女ははっと我に返った。

「ここは・・・父上・・・」

意識を取り戻したらしい。殺しは中止だ。

「ティーリーン。」

皇の目線に気付いて、少女は部屋を出た。

大きく深呼吸を繰り返す。久しぶりに会ったあの女は、意外に鋭い目をするようになっていた。

すぐ泣いてはすがってくる子だったのに。正面に立って、自分に口をきくようになるとは。

皇が出てきて少女の隣に立った。

「礼を言う。」

「いいえ。皇子様を怪我させてしまったのは私の責任ですから。」

「どこに、行っていたのか？」

目を合わせようと皇は努力したが、少女は顔を背けて目を閉じた。

「・・・言わなくては駄目ですか？」

「今後もそういうことがあるのか？それだったら、困る。」

「義母が病気だったんです。・・・どうしても一目見たくて。でも、もう大丈夫です。亡くなりましたから。」

今度は皇の方が目を背ける番だった。母親がいたことにも驚いたが、一目見たいなどという感情が彼女にあつたことにも驚いた。

少女は礼をして立ち去っていった。その意外に華奢な背中を見つめる。やはり一人の少女なのだとふと思った。

「父上。兄上の容体は？」

可愛らしい声に皇は振り返った。目に入れても痛くないほど可愛がつている愛娘、ヴェナ。客観的に見ても、美少女だ。

緩い巻毛の金髪。くるくるとした青い目。長いまつげ。ふつくらとした唇。

あのレヴィンでさえも、ヴェナのことは可愛がつている。

「ああ。今毒が出て、一眠りしたところだ。」

「あのティーリーンって子が・・・？」

「そうだ。」

ヴェナは眉を寄せた。レヴィンがヴェナを可愛がっているのと同様、ヴェナも兄を慕っている。その敬愛している兄に美しい少女がくっついていいるのを快く思っていないらしい。

「兄を助けてもらったんだぞ。感謝しなさい。」

父親に諭されて、ヴェナは不本意ながらも微笑んでみせた。

「分かりました。兄上はきつとお礼を言わないでしようから、代わりに言っておきますわ。」

優雅に一礼。皇の目下の悩みは、彼女の嫁ぎ先だ。北の友好国、マチュアか、西の友好国、トリスディア。だが、どちらも小国で、贅沢は出来ないだろう。ヴェナが満足しないのは目に見えていた。かといって嫁いでから、自国にかえってきてしまったら、国同士の関係はぎくしゃくしてしまう。

そんな父の心配も露知らず、ヴェナは軽やかな足取りで、ティーリーンの自室に入っていた。

「お久しぶり。ティーリーン。今回は、我が兄の命を救ってくださり、ありがとうございます。」

「いいえ。義務を果たしたまでです。」

「まあ。謙遜がお上手で。」

ティーリーンはうつむきながら、唇を尖らした。こういう礼儀には詳しくない上に、興味がない。皇女に失礼がない態度を取り続けられるとは限らない。

それに・・・

「あら、誰か他にもいらっしやるの？」

武国であるドルチェ国では、いくら美しい皇女といえど、力ば身につけておかなければいけない。

気配を感じ取ってヴェナは一步前に出た。

目に入っただのはすやすやと寝息をたてる赤ん坊。

「なっ・・・なんで・・・？」

ヴェナの問いにティーリーンは肩をすくめた。いつかはばれず

にはいられない。それならば、先に皇女を味方しておくほうが利口だろう。

彼女にはやわらかい口調で、ヴェナに話し掛ける。

「じつは………ということなんです。ほっておくわけにもいかず。」

「それを私に話したのは何かの意図があるのでしょうか？」

ヴェナは微笑んだ。意外と優しい笑みだった。

「まあ……」

思わず目を逸らすと、ヴェナは赤ん坊を抱き上げた。

「可愛い男の子です。でも、人間を育てるのは犬を育てるのとは違いましたよ。」

「分かってます。」

「二人で育てられるでしょうか？」

「
・
・
・
努力します。」

ティーリーンとヴェナの目が合い、思わず二人は微笑み合った。案外、いい子なのね、そうヴェナは思つて赤ん坊をあやす。彼がどんな運命を担うことも知らずに・・・

第七章 ヴァン

事態にあまり進展はないまま、五年の月日が経過した。サルデイナ王国はドルチェ国に占領され、時折内乱は起こったものの、比較的平和な日々が続いている。とはいっても、それは上辺だけで、町には貧民があふれていた。

「おめぐみを・・・」

汚らしい女にすがりつかれて、男は眉をひそめ、振り払った。

彼こそ、ドルチェ国皇子レヴィンである。その後ろにはティリーンの姿もあつた。幾分また背が伸び、表情には憂いが漂っている。

「おめぐみを・・・」

女は繰り替えし、ティリーンはため息を吐いた。レヴィンはしつこい奴が好きではない・・・

「ティリーン。」

「はい。」

「切れ。私が誰だか思い知らせてやれ。」

「はい。」

僕には従うことしか能がない。だが生憎私はただの僕ではない。ティリーンはそう思つて微笑んだのだが、足元の女は何か違う意図を感じたようで、あどずさつた。だが、逃げていこうにも体が動かないらしい。

哀れだ・・・彼女が、ではない。彼女を見て優越感を覚えているレヴィンが哀れだった。

「ここで血を流すと後始末が大変では？向こうの裏通りでいたぶつてやります。」

「ああ。」

レヴィンはもう議論する気はないというように手を振った。

ティリーンは見掛け上、女を追い立ててみる。

「お、お許しを・・・」

裏通りに入ると、女は蚊の泣くような声で懇願しはじめた。

「ほら、あげるから。」

少女はぎこちない笑みでパンを差し出す。偽善だとは分かっていた。彼女にこれから毎日パンをあげるわけにはいかないし、彼女以上に困っている人々全てにこうしてあげるわけにもいかない。

それは単なるレヴィンへの反抗かもしれない。もしくは、自分がまだ人間以下になっていないことを確かめるための儀式かもしれない。

同じ頃、城では、ヴェナが侍女とお茶をたしなんでいた。この侍女は、ティーリーンが拾ってきた男の子の母親代わりである。

「ヴァンは元気そうで、何よりね。」

庭では、男の子、ヴァンと侍女の実子であるルナが遊んでいた。二人は、自分達が双子だと思っているが、やがて・・・いや、今もある程度は気付いているのだろう。

ルナは、両親譲りの明るい金髪に、緑の目をしていた。可愛らしいが、とりたてて人目をひかない、庶民的な女の子だ。

一方ヴァンは黒髪に黒の目。利発そうな美男子である。生まれながらに気品があると思うのは、ヴェナのひいき目だろうか。

「ヴァンの馬鹿あ。」

何かからかわれたのか、ルナがヴァンを叩く。侍女はぎよつとしてヴェナを見つめたが、皇女はほほ笑みを浮かべて見守っていた。彼女は少し変わった、と侍女は思った。兄に依存していたのに、少しずつ自立してきている。ヴァンという守るべき対象ができたからだろうか。それとも・・・ティーリーン、彼女の存在も大きいだろう。

「お帰りなさい。ティーリーン。」

ヴェナは顔をあげて微笑んだ。

ヴァンがティーリーンに抱きつく。どんな攻撃をしかけても動じない

「お姉ちゃん」

が、ヴァンは好きだった・・・

「どうですか？サルディナ王国は？」

「荒れてます。国民は精神できにも深い傷をおっているようで。」

「そう、羨ましいこと。それだけ愛国心が高いのね。」

ヴェナはため息を吐いた。

「我が国が滅びたとしても、喜ぶ人こそいても、悲しむ人など・・・

」

ティーリーンは返す言葉もなく俯く。

沈黙が広がるなか、ヴァンとルナの声だけが響いていた。

ティーリーンは空を見上げる。好きで大っ嫌いで、会いたい

けど殺したい、あの子もこうして空をみているのだろうか。

第八章 メイファ（前書き）

これからちゃんと更新していきたいと思っています。

第八章　メイファ

メイファは見上げていた空からふつと視線をそらした。突き抜けるような青空の向こうから、あの子が見つめているような気がしたのだ。

ロガード共和国に逃げ込んで、五年が経った。平和に慣れてしまっている自分達がここにはいる。

「メイファ。大丈夫？」

焦燥感を感じながらも、体は動かず暖かい陽だまりに馴染んでいる。ため息をつきつつ、中庭でたたずんでいるメイファに、ケイトが近寄ってきて笑顔で声をかけた。

この国に逃れてきたときには幼かったケイトも、もう十二歳である。レヴィン皇子を瀕死の重体にして自らは死んでいた姉に良く似た、優しい少女だった。

「大丈夫です。ケイト様。」

「このまま、時が過ぎていってしまえばいいのについて思うの。私は祖国のことなど覚えていないし。でも……」

ケイトの目に悲しみと決意がよぎる。

「評議会が動きだしたわ。ラウルお兄さまが働きかけて、戦争に持ち込もうとしてるみたい。でも、いまひとつ大義名分がなくて。」

すぎるような目を、見つめていられなかった。

そんなに、信じないでください、頼りにしないで、と叫びたい気持ちをとんとか堪えて、メイファは硬い表情で答えた。

「ケイト様……大義名分なら、ありますわ。ロガード共和国は昔からサルディナ王国と親交がありました。サルディナ王国とは貿易も行われていましたし。そのサルディナ王国が今はひどい有様です。それを解放したい、といえば諸国も賛成せざるを得ないのではないのでしょうか。もちろん、サルディナ王国が分割される恐れはありませんが、こちらにはあなた方が……正当な王家の血をひくあなた方

がいらしやるのですから。」

メイファの言葉に、ケイトは顔を明るくしたが、ふっと声を潜めて呟いた。

「こんなことを言っただけあなたを困らせたくはないのですが・・・」

ケイトは唇を噛み締める。

「サルディナ王国を見てみたいのです。私は、悲しいことにほとんど何も覚えていないのですから。」

メイファは目を丸くしたものの、すぐに頷いた。これは戦場に戻るいい機会かもしれない。ケイトの顔は知られていない上、自分がいけば危ない目には会わないだろう。

「今日にでも行きたいのです。迷惑って分かっています。でも、この目で見て、決めたいのです。戦争に反対するか、賛成するか。」

二人が歩きだしたその頃、王宮ではユリーナがお茶を嗜んでいた。彼女ももう二十二。大人の女としての気品が始めてはいるが、傍らの書類に目をやり唇を尖らす表情は、どこかあどけなさを感じさせる。

彼女の膝には五歳になった男の子がちゃっかりと収まっていた。

「ねえさま、ねえさま。」

「ん・・・なあに、リユート？」

「遊んで！」

最初の反抗期をすぎたリユートはまた甘えん坊に逆戻りしたよう、ここ二三日はユリーナにべったりである。

ユリーナも母親気分、リユートに甘えさせてるのだった。

「うん・・・ちよっと待つ」

「にいさま！」

リユートは新しい遊び相手を見つけると、振り返りもせずラウルのもとにとんでいった。子供は時にその無邪気さが人を傷つける。ユリーナは拗ねたように頬を膨らまして書類に没頭してるふりをした。

「ユリーナ。」

「・・・」

「ユリーナ。」

「・・・！何よ、びっくりしたなあ」

「いや、絶対気付いてただろ。」

ラウルは呆れたような顔で肩をすくめる。

二十四になるラウルは人目をひくほど格好よくはないが、人の良さそうな笑顔と誠実な態度で多くの人から慕われている。

「で、何？」

「ルウイのことなんだけどどう思う？」

二人の間に沈黙が訪れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8686a/>

NO REGRET

2010年10月9日17時55分発行